

## 「『からだ』から『障害児・家族・地域』の支援を考える」報告

著者	大橋 さつき
雑誌名	東西南北
巻	2006
ページ	242-246
発行年	2006-01-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1073/00003348/">http://id.nii.ac.jp/1073/00003348/</a>

# 『『からだ』から『障害児・家族・地域』の支援を考える』報告

**大橋さつき** 所員・人間関係学部専任講師

## シンポジウムの概略

2005年7月16日、和光大学総合文化研究所の「催し物」企画として、シンポジウム『『からだ』から『障害児・家族・地域』の支援を考える～ムーブメント教育・療法の実践を中心に～』が開催された（会場：和光大学会議室ABC）。本稿は、このシンポジウムの記録をもとに、その成果をまとめ報告するものである。

今回のシンポジウムは、障害児の療育に活用されている「ムーブメント教育・療法」の理論と実践について理解を深めながら、「生命」、「ケアの原点」まで視野を広げ、障害児をとりまく家族や地域に対する支援のあり方について考えることを目的として、企画された。

まず、筆者（大橋）が、「障害児とその家族を対象としたムーブメント教室の実践報告」と題し、「ムーブメント教育・療法」の理論を軸に展開されている親子教室の現場について報告した。特に、同日、シンポジウム開始前に実施された「親子で遊ぼう！『和光ムーブメント教室』 夏祭り」については、その場で記録した映像資料をもとにプログラムの内容や子ども達の様子を振り返りながら検討した。続いて、小林芳文氏（国立大学法人横浜国立大学教授）による講演「ムーブメント教育・療法の理論から地域支援・家族支援を考える」では、教室の実践報告に解説を加えながら、それらの活動が地域支援、家族支援として広がっていく可能性について言及した。また、本学の最首悟氏（人間関係学部人間関係学科教授）は、「重度重複障害の娘をもつ親として」と題し、娘（星子さん）の話を紹介しながらケアの本質に関わる講演を行った。当日は、障害児とその家族15組が「和光ムーブメント教室」の参加から引き続きシンポジウムに出席した。さらに、近隣の教育関係者、高校生、他大学の学生、本学の教職員学生などが加わり、合わせて50名以上

の参加者で会場が賑わった。シンポジウムの最後には、出席者による座談会の時間が設定され、積極的な意見交換が行われた。

## 家族支援・地域支援とムーブメント教育・療法

「ムーブメント教育・療法」は、子ども（対象者）の自主性・自発性を尊重し、動くことを学び、動きを通して、調和の取れた発達を支援する方法で、現在、特に、障害児の発達支援に活用されている。子ども自身が動く喜びの中で、「からだ（動くこと） あたま（考えること） こころ（感じること）」の調和のとれた発達を図り、決して「訓練」ではなく、参加者全員が達成感や楽しさを得ることが基本となっている。

また、近年、筆者らが実施している「ムーブメント教室」では、特に、米国の IFSP（個別家族支援計画：Individualized Family Service Plan）を参考に「家族支援」を目指したプログラムを目指している。IFSP の特徴として、子どもだけでなく、子どもの生活の基盤である家庭の安定を目指している点があげられるが、教室においても、対象児本人だけでなく、本人を含んだ「家族」全体を対象として捉え、個別の家族を支援するという考え方を基本としている。各々の地域で密着した形で行われるムーブメント教室が、月 1、2 回の開催であっても、参加した家族一人ひとりが十分に楽しさを実感し、アイデアを持ち帰ることで、各家庭が生活の中で自然に展開できる独自の「ファミリー・ムーブメント」が生まれていくだろう。

## 「からだ」から「障害児・家族・地域」の支援を考える

最首氏からは、ムーブメント教室の活動に対する検討に、娘、星子さんとの体験を重ねながら、「からだ」無しで、教育や支援の問題を語ってはいけないという意見が出された。

日々、あらゆる場面で、あれができない、これができない、と指摘され気にしている障害児の親達にとって、「個々の身体はそれぞれ違い、他者との比較はできないのだから、個々の身体の絶対性、個別性を受入れ、その身体が欲することをそのままに信じること



シンポジウムの様子（左：小林氏、右：最首氏）

が大事だ」と述べる最首氏の話は、子どもが「ここに居る」ことの意義を捉えなおす新鮮な衝撃を与えたようだ。また、小林氏がムーブメント教育・療法においては、プログラム作成にあたって、「身体と環境との対話」を重視しており、その際、物理的な空間や湿度温度のみでなく、音楽、遊具、人、その場に居合わせる全てのものが互いの身体にとって「環境」となるのだという考え方が説明された。

### 「和光ムーブメント教室」の可能性

和光大学で開催されたムーブメント教室の特徴として、最首氏は、以下の3点について指摘した。活動に一貫して「接触」の場面があり、これは、「触れる、撫でる、傍に居る」というケアの原点に通じるものである。空間、人数共に、規模が適切である。(これが多すぎても少なすぎてもいけないのだろう。) 若者(学生)の力が最大の魅力であり、不可欠である。

さらに、これまで様々な地域で数々のムーブメント教室の指導にあたってきた小林氏も「和光大のムーブメント教室は新鮮」と評した。特に、学生達の活躍については、学生達が子ども達のために「創造的なプログラム」を考え準備する過程で、彼ら自身も創造的な活動に入っており、それらが力となって場を盛り上げるのだらうと述べた。

また、これまで、音楽伴奏のスタッフとしてムーブメント教室に携わってきた職員の山中ちひろ氏(学部事務室)は、「大学は地域の財産であり、教



和光ムーブメント教室の様子

員・学生・職員が三位一体となって、地域に必要とされることを積極的に実施することが必要である。また、そのことが、結局は、大学そのものを成長させるのではないかと感想をまとめた。

ムーブメント教室に参加した学生の発言からは、自分達が地域に必要とされている「場」を創り上げる一員になれたことへの達成感と今後の活動に対する意欲が感じられた。

最首氏が障害児の親という立場から自身の体験をもとに語りかけたことで、保護者の中には共感を覚え勇気が湧いてきたと感想を述べる者が多かった。また、世代を超えた保護者間の交流も可能となり、回収したアンケートからは、保護者同士の交流の機会としても今回のような場が求められていることが解った。

## さいごに

今回のシンポジウムは、筆者自身が実母の病に直面したことが契機となった。私事ではあるが、さいごに、お力添えいただいた方々への感謝の想いも含め、この出来事について述べさせていただきたい。

今年4月上旬、突然、故郷長崎の実母が肝臓を患い倒れ入院した。元気で明るく働き者、家族想い……そんな印象しかなかった母の弱りきった姿に、周りがただ動揺している間に、日に日に病状は悪化した。5月に入ると、ついに「生体肝移植手術」しか助かる見込みがないと診断され、筆者がドナーの第一候補者として検査を受け、移植手術の日が5月下旬に決定した。最終的には、娘の身体を想う「親心」からか、母は土壇場になって移植手術を拒否し、同時に医者も驚くほどの回復を見せ始め、手術の延期、保留を経て、移植を受けないまま7月に退院した。この間、筆者は、ドナーという立場上、長崎の地を離れることが許されなかったため、長い時間、母に寄り添って過ごすことができた。どんなに看病しても母の病状が良くならず、小さく細くなっていく母の身体に触れる度、悔しくて不安で泣することもあった。家族は互いに支え合いつつも、疲れがたまり、ふとした言動にぶつかり合った。父の食事を差し入れてくれたり毎日のように声をかけてくれたりする近所の人々の温かさに、自分が育った田舎の街について、あらためて「地域の力」を実感した。正直なところ、筆者にとっては、これが、自らの問題として「ケア」や「家族」、「地域」について最も深く考えた経験であったと思う。そして、おそらく、赤ん坊の頃以来、最も母の身体と密に触れ合った時間であった。

無事に大学の職務に戻り、これまで、「ムーブメント教室」における活動を通して、障害児とその家族との関わりを持ってきた自分こそ、一度立ち止まって考える機会が必要だと感じ、今回のシンポジウムを企画した。忙しい中、講師を引き受けてくださった小林教授、最首教授、また、実施に際し、準備の段階から協力してくださった研究所の方々、職員や学生の皆さんに心から感謝したい。

お陰様で、母は、現在、自宅療養を続け順調に回復しており、ただ一日一日を過ごすことに懸命で、食べる、動く、寝る、笑う、そんな一つ一つの営みを周りの人々と共に楽しんでいるようである。

（おおはし さつき）